

令和 7 年 度
宮崎国際大学 教育学部
一般推薦Ⅱ期

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、6カ国で学校教育を受けた経験のある、ロシア出身のキリーロバ・ナージャさんが、それぞれの国の教育の違いについて述べたものです。各国の学校の採点システム（評価方法）の違いとナージャさんの意見をまとめなさい。また、それを踏まえたうえで、学校で子どもたちの学習を評価する場合、あなたはどのような方法がよいと考えますか。合わせて600字以内で述べなさい。

学校のテスト。100点をとると、とてもうれしいですね。それは、万国共通の気持ち。日本の子どもが「100点」をとって喜ぶように、ロシアの子どもは「5」をとって喜び、アメリカの子どもは「A+」をとって喜ぶ。

数字だったり文字だったりするが、すべてに共通することは最高得点であること。

でも、同じ「最高得点」でも「最高得点」をたくさん与える主義と、なるべく与えない主義というのが国によってあるようだ。フランスの学校に転校して、そう感じた。いくらとてもよくできたテストでも、16/20以上はなかなかとれない。特に作文のような正解がない問題が多く出題されるフランス語などの授業になればなるほど、この傾向は見られた。

ある日、先生に聞いてみた。すると、「満点はパーフェクトを意味するけど、パーフェクトとはよっぽどのことがない限り起きない状態だ。そう簡単に毎日や週一で出合えるものではない。人生で何度かしか起きないようなことだ」と。

なるほど。確かに、私の解答はいい解答だったかもしれないが、パーフェクトかと言われたら、涙が出るほどの感動はない。わたしは、納得した。でも、そこから先生が感動するほどの解答とは何か、いつか出してみたいと思うようになった。

そういう意味で、フランスでは子どもも大人と同じように接せられる傾向にある。理由を説明して、人生はそう簡単に素晴らしいことは起きないし、努力が必要だと教えてくれる。でも逆に8割できていれば素晴らしいとも教えてくれる。

その逆を感じたのは、アメリカだった。とにかく褒められる。半分くらいしか分からなくても、いいところを見つけては先生が褒めてくる。「よく頑張ったね!」とかわいしいシールがノートに貼られる。そして、全部できるまで、つまりそれが満点なのだが、何度でも取り組むことができる。「わたしでも満点がとれる!」というのが自信につながり、子どもは頑張るようになるという仕組みだ。でも、「それくらいでいいんだあ」という子どもも出てくる。そのために、^{*}アドバンスドクラスや^{*}飛び級が存在するのもかもしれない。

「褒める」方式の逆をとっているのは、ロシア。いい点をとるのも重要だが、それよりみんな悪い点をとるのを恐れている。5段階しかない評価システムで、「1」は基本つくことがない。つまり、「2」が最低得点。アメリカでいうところの「F」だ。カタチが、白鳥に似ていることから、「また白鳥があなたのところへ泳いできたの!？」と母親に怒られることがしばしば。さらに、2ばかりとる人を示す言葉もあり、これだけは呼ばれたくないから「2だけはとりたくないなあ」と思うようになり、最低限は勉強するようになるというわけだ。

採点システム。ただの数字や文字に見えるかもしれない。でも、褒めて育てるのか、厳しさをもって育てるのか。「満点」という概念を設けるのか設けないのか。実は、これはすべて学びへの姿勢に影響を与えている。採点システムを柔軟に変えていくことで、どんどん子どもたちのやる気を引き出していけるかもしれない。

※ アドバンスドクラス … 上級クラス

※ 飛び級 … 優秀な生徒が学年を飛ばして進級する制度

(キリーロバ・ナージャ『6カ国転校生 ナージャの発見』による)